明現寺の殿　鐘（青銅製）　（福山）

太平洋戦争中、金属資源にとぼしいわが国は、国内のあらゆる資材を動員した。寺社等の金属類も例外ではなかった。鐘楼（しょうろう）にあった※梵鐘（ぼんしょう）は供出（きょうしゅつ）になったが、本堂の「※半鐘（はんしょう）」は供出を免れ現存している。小型の鐘であるが、四面に156字の陰刻銘文（いんこくめいぶん）がある。

半鐘には、鋳造した鋳物師名が刻字してあるのが普通であるが、この鐘にはない。

製造が明和３年（1766）丙戌（ひのえいぬ）※五月穀旦となっているので、当時の鋳物師事情を「鳥取県関係梵鐘年表」（有福友好『梵鐘余光』）からみると、小鴨谷の鋳物師、齋江、蓑原、佐治、馬渕には実績があり、その何れかの製造の可能性が高い。

特に、齋江家の文書によると、明和２年（1765）東伯、大経寺（だいきょうじ）他明和７年（1770）までに４件の受注があり、今後の調査に委ねたい。明現寺の住所が、久米郡松神村（くめ ごおりまつがみむら）（現・福山）となっている。その半鐘は銘文から宝暦12年（1762）の洪水後に造られたもので、明和８年（1771）現在地へ地替したとき、一緒に移転されたものと判る。

（注）

梵鐘：寺院で用いる釣鐘のこと
半鐘：小型の釣鐘、寺院内の各種の合図に用いたが、のちには火災警鐘用に使った。
五月穀旦：５月初めごろ